

『府松本十景句集』 翻刻と解題

はじめに

信州大学人文学部日本文学分野では、平成二十九年、学生有志により、自主ゼミ「信大人文若艸の会」が発足した。以来、教員の協力のもと、全員の興味関心の方向性を考慮の上、文献を選定し、全文翻刻と内容の精読に取り組んでいる。平成三十年度には、信州大学附属中央図書館所蔵『府松本十景句集』の全文翻刻を完了したので、ここにその全体を報告する。

翻刻にあたっては、信州大学附属図書館ホームページ「コレクション」のうち「松本女子師範学校郷土資料・多湖文書」において公開されている画像を用い、必要に応じて同館所蔵の原本を確認した。本稿のうち、「①『府松本十景句集』書誌情報」「②解題」は、「若艸の会」メンバーである小出直樹が、本書の精読を通じ作品としての特徴を明らかにすることをテーマとして作成した、卒業論文の成果の一部に基づく。なお、本稿を成すにあたっては、小出ほかメンバーの承諾を得た上で速水が全体の調整と加筆とを行なった。

速水 香織（信州大学人文学部）
小出 直樹（信州大学人文学部平成三十年卒業）
室山 緑（信州大学人文学部平成三十年卒業）
若林 美歩（信州大学人文学部平成三十年卒業）
中村 恵（信州大学人文学部令和元年度卒業）

①『府松本十景句集』書誌情報

内題 松本十景（目首、花実園野牛著）
外題 府松本十景句集（題簽・表紙中央に貼付）
序跋 題松本十景序（花実園野牛）、松本十景発句集序（不来坊）
編者 花実園野牛
体裁 写本。全一冊。袋綴・四ツ目綴。縦二五・九糎×横一八・三糎。貼り紙・付箋等なし。
表紙 縹色無地。原装。なお表紙に薄朱・無地の保護紙を付す。
紙数 四十丁（白一丁、墨付三九丁）。
書入 序文に朱の句点、及び脱字の補いあり。本文に朱で訂正、及び脱字の補いあり。
本文 半葉九行。挿絵（彩色）十葉。
蔵書印 「郷土資料」（朱印）
備考 松本女子師範学校旧蔵。「郷土資料」の蔵書印。付属資料として作者一覧「十景作者」一紙。

② 解題

『府松本十景句集』（以下『松本十景』）は明和三年（一七六四）に成立した発句集である。本書は松本女子師範学校郷土資料室の旧蔵であり、現在、信州大学附属図書館中央図書館に所蔵されている。現松本市に十の風景「山家桜花」「宮村夜燈」「今町茶店」「放光蓮池」「新橋鶉飼」「念来時鐘」「筑摩納涼」「西山残雪」「雌羽瀑布」「浅間温泉」を見出し、これらを題とする句集である。四十二名の俳人がそれぞれの題に一句ずつ寄せており、作品全体としては四百二十の発句が収録されていることになる。また、書中には十景それぞれの風景画も掲載される。十景の選者及び本書の編者である花実園野牛が十景の風景画を描き、画賛の発句を加えている。本書は、はやく鈴木俊幸氏が著書『一九が町にやってきた』においてその存在を紹介しており、次に述べる「十景作者」を翻刻したうえで、当時の松本地域において俳諧に親しんでいた人々の実態に言及している（注）。

「十景作者」は、本書に添付された、編者である野牛を除く四十一名（内「追加」八名）の入集俳人の俳名と実名を対応させた紙片である。これは作者の身分を明らかにし、当時の松本俳壇がどのような人々によって構成されていたのかを推測可能とする、貴重な資料である。

また、本書には序文が二編付される。宝暦十二年（一七六二）に稲村楽仲が書いた「題松本十景序」（以下「序文①」）は松本の十景選定に際して記されたものであり、明和三年（一七六四）の不来坊の寄せた「松本十景発句集序」（以下「序文②」）が、本書『松本十景』の成立に際して書かれたものである。

序文①の内容を具体的に述べる。序中には、本書の主題となる十

景選定までの過程、及び十景それぞれの説明がなされている。これによると、松本の十景は、野牛が中国の「西湖十景」に触発されて設定したものであるという。

十景それぞれが、現在の松本市のどこを示しているのかに関しては、本文及び目次より、以下の地域また寺社等に該当するものと思われる。

- (1) 「山家桜花」…山辺谷一帯、及び旧林村、旧中山村方面を含めた地域
- (2) 「宮村夜燈」…深志神社（松本市深志）
- (3) 「今町茶店」…白板村内における、城下町割の外にあった一部地域
- (4) 「放光蓮池」…放光寺（松本市蟻ヶ崎）
- (5) 「新橋鶉飼」…島内地区内
- (6) 「念来時鐘」…旧念来寺鐘楼（松本市中央）
- (7) 「筑摩納涼」…筑摩神社および付近（松本市筑摩）
- (8) 「西山残雪」…乗鞍岳（松本市街地から見て西に位置する）
- (9) 「雌羽瀑布」…大村、玄向寺の裏山
- (10) 「浅間温泉」…浅間温泉

続いて序文②を見ると、「人々の清作。およひ予か乙調にいたるまで。なにはこのことよしあしをわかちえらめるとはなく。うるにしたかひてことくくまねき入れつゝ。」との記述があり、各作者から、詠句が野牛のもとに届けられた順に収録されていることが伺える。『松本十景』各章において作者の順番が一致していないこと、そして各章の発句の季節・時刻等が統一されていないことなどから、本作品は、松本各地の名所に、実際に訪れて句を詠んだといっ

た、いわゆる吟行によるものではなく、各作者に十景の題が与えられ、各々がそれに応じて、おそらくは実景を目にする機会を持ちつつも、各所に関する知識に基づき、想像力を駆使して句作が行われたと考えることができるだろう。

また、本作品には作者の「追加」が見られるが、この序文②が書かれた当時はその「追加」が想定されていなかったことが、野牛が「しりへにみつからの佳章をもちいつらね」た、という不來坊の記述から推測される。各章末尾の句が野牛の発句であることから、もとは野牛がそれぞれの最後を飾る予定だったらしい。

ただ、この序文②は明和三年丙戌菊月下旬（二七六四年九月下旬）のものであり、「追加」の俳人も含めて書かれた「十景作者」は同年初冬日のものである。そのため、追加を行うことが決定したこと自体は、この序文②からそれほど経過していない時期であったといえよう。この「追加」の発句であるが、「山家桜花」から「浅間温泉」に至るまで、作者の順番が全て同じである。そのため、予め詠み合わされた「追加」の発句が、整理された状態で編者である野牛のもとに届けられたのではないかと考えられる。

以上より、本書の構成としては、各景に四十二句が収録されているが、一句目から三十三句目までが、もともと入集予定だった俳人の発句が野牛のもとに届けられた順と思しく、三十四句目に野牛の画賛の発句が置かれた状態となっている。そのあとの三十五句目から四十二句目までの八句は、収録順序が整理された「追加」の発句となっている。

（注）高見書店二〇〇一。第二章「町人文化のさきがけたち」において、本書の概要の紹介および「十景作者」記載の作者群の身元照

合が行われ、当時の松本俳壇には藩士を中心としたグループと上層町人主体のグループとが存在し、一部交流を保っていたことが明らかにされる。

③ 翻刻

【凡例】

・以下は、信州大学附属図書館中央図書館蔵『信松本十景句集』の全文翻刻である。

・翻刻にあたっては、発句に通し番号を付し、旧字・俗字は人名地名に用いられているものを除き通行字体に改めた。また本文中の訂正箇所は、取消線、句点以外の書人は「 」で示した。句点に関しては、序文に見られるもの全てが朱書人であるため、見やすさを考慮し、「 」では示さなかった。

・付属資料「十景作者」は、その翻刻を末尾に示した。

【翻刻】

『信松本十景句集』

題 松本十景序

西湖のしつけいは。みぬもろこしの境とはいへと。
ちかきころ清人汪鳴瑞かから歌にもしるゝ。いはんやまのあたり花実園のあるし。松もとのよもに
十のなかめをゝきて。いまもせうえうし。後の人

にもつたへもてゆかむとにや。けに其ころはへ
たくひあらしの山もここにおほえて。ひとつに
やまむへの桜花。いつれの時にかうつし植けん。

(二才終)

いてゆのもとにうちにほいて。をのつからみる
人のころあらふかごとく。をのか家路にかへさをも
わすれて。くれなはなけのとうちすし侍りなん。
おもふにおほかたの時かたにしらいとのくる人たえ
すといふなるに。まいて雲とみ雪とみる

ころをや。ふたつに宮むらの夜灯は。みつ垣の
久しき世より。その明神のしつまりおはする

(二ウ終)

を。中つころあまみつ宮うつりませるをもて。今
はふたはしらのおほんひかりにやはらき。蛭を
あつめ雪にてらせる。まなひの窓のともからは
さらにして。なへての人も此御かけをいたゝき

まつらぬはなく。猶松の葉の散うせず。柳のいと
のよりくゝにからけて。神のゐとくのあきらけきか
きりは。まさきのかつらななき世までも。これを仰
かむことをしそおもふ。みつにいままちの茶店は。もと

(二才終)

よりおほやけのはいまちにあらねは。あやしの賤
山かつ牛かひわらはのゆきゝをとゝめて。酒はおに
ころしとかおとろくゝしきあたなして。さりなは
あはひきたをかにもあらて。田にしにひともしのさと
うちにほひたる。かのひるくひの女も立ましり

ぬへく。いひもてゆけはされはみたるやうにて。
いやしけなるけちめおほかれと。はいかい哥には
これをおかしみと名つけて。興の一体ともす〔な〕

れは。よつに放光のれんちは。すなはち法には

につらなりて。神咒のこゑのからひたる。まにはん
とま。かしこには宝蓮華と翻し。こゝにはたか
らのほちすはなど釈するもおかしく。ひめ神の
みむるかゝやくはかりにうちかほり。にこりにしま
ぬそこのこゝろもくみてしるへし。五つに新橋の

(二ウ終)

うかひは。舟しらぬなかれをかちわたりして。

みおさかのほる幾瀬のうきしつみ。〔先〕此世にもくるし
からんに。さすかにかゝり火の影。波のおもてをこかし
て。えならぬみものなりければ。ゆきかふ人も

うきはしのうへすきかてにこそ。むつに念來の
ときのかねは。その蓮華漏のしたゝりよりい
て。ひとり大とこの六時を禮するのみならず。と

(三才終)

こしなへに。城樓の時のつゝみをわして。よの
いとなみのたよりとそなれりける。七つにつかま
の納涼は。名におふ糺のけしきにはあらねど。亦
これみたらしのなかれをひきて。あつさゆみ。やはた
のみかけをうつし奉り。神祭る夜にところせく。

まうてあつまりためるか。こなたには襦かつく
ためしなけれど。神のいさむるみちならぬより。たれ
か又恋せしのみそきをやせん。さるままにいみ
しうけしきたつ色このみとも。十日の月のかた
ふくをもしらすと。このほとある人のかたりき

(三ウ終)

こえ侍りし。おもふにそのかみの神宮寺。今は名
のみに成ぬれど。一字の古鐘つかぬひゝきをのこし
たるも亦あはれなりき。しらすうちむれまど

ゐする時。むかしをしのふ愁人もあらんか。やつに
西山のゝこんの雪は。こと所の春にをくれて。ふも
とのむら里。こなたかなたの花さくらにあひて
し。猶はたかのこまたらになりゆくころほひ。
ひとり乗鞍かたけいやたかく。つれなくきえぬ

(四才終)

白妙のなかめは。するかなるふしのね。こしのしら
山。いつれかあはれならさんやは。こゝのつに
めとはの瀑布は。大ひさのうてなよりおちて。われ
よの中とちかひのいとたくふへく。くりかへしかへ
してもいと尊かりけり。とをにあさまの温泉は。
浅間のたけに名をひとしくして。たつ烟には
あらねど。わきいつるゆけにおもかけをかよ

はし。をちかた人もあゆみをはこひ侍らぬはなし。
ましてわかともから春の暮つかたのえんなるに。
くはさふたりみたり。わらはへみたりよたり。りう
くはんに柳註に、はく、名、ゆあみし。水くまに、水汲は、地の名。

(四ウ終)

いこひて詠して帰らんこそいとたのしかるへけれ。
しかあるに園のあるし。いはゆるよそもしを袖にし
きたりて。これか序のこと葉あらん事をこひ
きこえられしか。やつかれ琴のおたえにしより。

はちはかりのとしなみをわたれば。山水のこゝろ
はへはさらにもいはす。わつかに爪しらへやうの
ことをも物するにたへす。さはいへとあるしはだけ
馬の友かき。何くれといなみかたきゆへあれば。いにし
とし兼山のおきなの。翁姓は井口氏。名は春通。あさはなは鬚子。もとのはは春雄。洛陽にすめり。和歌を能

(五才終)

して我光。人の解たり。長はしの記記は園のあるしの父。方山翁の文旨に和歌の文法をもて、はいかい

うたの器につくられたためしにしたかひ。すゝりの海の
そこはかとなく。もしほ草かきあつめ侍りしは。顰
に効へるわさなるへけれど。いささか十のはしめに
かうふらしむるならし。

宝暦十二年

稲村韶鳳棠仲甫識

壬午のみな月

(五ウ終)

松本十景

花実園野牛著

山家桜花

山家地名有温

泉称白糸湯

宮村夜燈

宮村即宮村大明神

天満宮両廟所在

今町茶店

今町

地名

放光蓮池

放光寺名池中

有弁材天祠

(六才終)

新橋鶉飼

新橋在丁

犬飼之地

念来時鐘

念来
寺名

筑摩納涼

筑摩郡名八幡宮廟堂当日有
神宮寺今跡廢古鐘僅存耳

西山残雪

西山非独一山名
高峯並峙者皆然

雌羽瀑布

雌羽山名瀑布在予大悲閣下雌羽
瀑布通作女鳥羽滝乃終文之云

浅間温泉

浅間
村名

松本十景発句集序

茶佛叟かつて烟霞の「癖」ありて。

蕉門の正統三たひつき。我ともからをいさ

なへるあまり。あらたに松もとの十景をあら

はし。松老詞宗の序の言葉を得て。これ

を不朽につたへんとにや。しかるにこたひ

人々の清作。およひ予か乙調にいたる

まで。なにはのこのよしあしをわかちえら

めるとはなく。うるにしたかひてことくく

まねき入れつゝ。しりへにみつからの佳章

をもちいつらね。巻軸すてになるにいたりて。

(七才終)

(六ウ終)

予に其はし書せよとなんきこえら
れしか。もとより筆みしかくさえつた
なしとはいへど。しぬし葉のしぬていな
みたらんも。亦かつ此道のほゐにあらね
は。つゐにふんてを閑窓にとる。

明和三年丙戌菊月下旬

不来坊序

(七ウ終)
(八ウ終)

〔空白〕

山家桜花

1 湯あかりの素顔笑ふな山さくら

2 木下まで山もなたれて桜かな

3 白糸の名に結ひとめよ散さくら

4 湯の山の雲は麓の桜かな

5 足引の湯山誘ふてさくら哉

6 湯の山に晒し／＼て「糸」桜かな

7 ゆの山の瀧にしたるゝさくら哉

8 湯の瀧は余所え流して桜かな

9 白糸の瀧となりけり山さくら

10 東雲の麓にはやし桜華

11 しら糸の名もあらはれて桜かな

12 湯も老を延るものなり山さくら

13 折る人もありしら糸の滝さくら

14 賤か家もけふは都そやま桜

15 佐保姫の裾やほかして山さくら

16 湯にあら霞に化粧ふ桜かな

四時園 露旨

其涼

風可

英紫

双李

畔鼠

渡柳

二藤

柳二

可笑

松宇

白羽

秀児

有明

香都良

我眉

(九才終)

- 17 しら糸を繰出すものや山さくら 輔良 (九ウ終)
- 18 白糸の流るゝ枝や瀧さくら 僧起雲
- 19 ゆの山にならふ滝あり桜花 作者不知
- 20 鰐口の緒に桜も見なせ医王山 其夕
- 21 湯あかりの駒下駄はよし山桜 女霞流
- 22 さくら花咲や湯山の洗ひ顔 不秋
- 23 桐原に駒は繋てやまさくら 姨山
- 24 時ならぬ雲の峰あり桜華 竹由
- 25 山さくら咲や湯入の花の宿 素因
- 26 湯の山の桜かさすや雲の袖 不来坊 (十才終)
- 27 湯あかりの吹れぬもよし山桜 楚雀
- 28 いつはらぬからや山家の初さくら 枝交
- 29 出る湯の名もしら糸の桜哉 山里
- 30 白糸の晒かけんややまさくら 履行
- 31 うつむくは湯の草臥や桜花 車洛
- 32 春の夜は籠に明るさくらかな 乙露
- 33 桜かな梅は兄とは言いなから 馬佛 (十ウ終)
- 34 湯あかりの立よる顔も桜かな 野牛 (十一才終)
- 追加
- 35 湯あがりの顔には雪吹け山桜 塵柴
- 36 山家とは名のみさくらの都かな 斑石
- 37 初さくら流るゝは湯の花ならん 巴菱
- 38 牧は其名のみ残りてさくら哉 不重
- 39 魁は湯にあたためて桜かな 友加
- 40 塩竈の名に湯烟のさくら哉 渡舟
- 41 湯の山やくる人絶ぬ糸さくら 梧月
- 42 下かけは浴衣の幕や山桜 竹里 (十一ウ終)
- 宮村夜灯
- 43 冬枯れて見れば大きな御灯かな 其涼
- 44 遥拝や夜灯見遺す落葉時 其夕
- 45 灯明は禰宜の所かおほろ月 有明
- 46 三日月に照り続きたる御灯かな 霞流
- 47 梅灯す時もかすかに御灯かな 秀児
- 48 灯火の和光は清し木下闇 香都良
- 49 梅桜夏もあかるき御灯哉 楚雀
- 50 鈴虫の音も澄渡る御灯かな 不来坊 (十二才終)
- 51 秋風もさはらぬ神や石灯籠 枝交
- 52 木隠し闇も真如の御灯かな 山里
- 53 郭公啼や御灯の朝ほらけ 起雲
- 54 闇の夜も御灯に照るや梅の花 竹由
- 55 此神の御灯や梅も火を灯す 不秋
- 56 灯明に百度まいりや火とり虫 素因
- 57 下闇も御灯に照るや神の庭 乙露
- 58 五月闇てらす和光や御灯の火 露旨
- 59 木の間もる〔御〕燈〔は〕涼し宵の闇 馬佛 (十二ウ終)
- 60 神こゝろ曇らぬ月や石灯籠 風可
- 61 寒梅もとほし添たる御灯かな 英紫
- 62 草を出てほたるも灯す宮居哉 車洛
- 63 すゝしめの虫は何々灯の光り 双李
- 64 みあかしの間にくもれて夏木立 畔鼠
- 65 神垣の奥も朧の御灯かな 二藤

- 66 橋妻にはくれて残る御灯かな 白羽
- 67 梅も火をともし添けん石灯籠 柳二
- 68 梅の火は昼を照して御灯かな 渡柳 (十三才終)
- 69 灯明の影は常盤や冬木立 我眉
- 70 灯明に火を配りてや飛蜚 不知
- 71 寒梅や(の)衛士にはあらぬ御灯かな 可笑
- 72 もろ共に梅もとほして御灯かな 姨山
- 73 みあかしの花やあやある闇の梅 松宇
- 74 白雨の跡は涼しき御灯かな 輔良
- 75 夕立〔暮〕の梅にかはりて御燈哉 履行 (十三才終)
- 76 秋も夜も更て御灯に神さひぬ 野牛 (十四才終)
- 追加
- 77 雪の夜は如何に手向けん御灯影 塵柴
- 78 みあかしや闇に柘榴のまた残り 斑石
- 79 みあかしや木々も照して紅葉時 巴菱
- 80 御火焼のこちらは細し御灯影 不重
- 81 さわる雲しらぬ御灯や満る月 友加
- 82 しんくくと森に朧の御灯かな 渡舟
- 83 梅の香も松もあやあるとほし哉 梧月
- 84 曇る夜も照る三日月や石灯籠 竹里 (十四才終)
- 今町茶店
- 85 軒端にも印の杉やことし酒 英紫
- 86 賑ひは秋を離れて茶店かな 可笑
- 87 泥足によるや茶店の田にし時 輔良
- 88 一やすみ酒の林やわたり鳥 素因
- 89 虫の名の馬追ひも啼茶店かな 畔鼠
- 90 煙草の火さかす茶店や秋の暮 露旨
- 91 夜はまた水鶏の叩く茶店かな 楚雀
- 92 冷麦は茶屋にまかせて流れ哉 其涼 (十五才終)
- 93 田楽の味噌や燕も巢拵へ 不來坊
- 94 薄穂掃く柳も植て茶店かな 竹由
- 95 往來の落てや茶屋の女郎花 乙露
- 96 此茶屋え出女ほしき涼かな 有明
- 97 出代の髪に繫くや茶の花香 履行
- 98 晴間待内は茶釜のしくれ哉 起雲
- 99 今町や雪の淡にも茶の花香 不秋
- 100 道連も今まち得たる新茶かな 秀児
- 101 雁かねは田の面え渡る茶店かな 枝交 (十五才終)
- 102 糸ゆふに繫き留たる茶店かな 風可
- 103 腰掛も門田の橋や茶屋の秋 山里
- 104 扣かぬに集る茶屋の時雨かな 作者 不知
- 105 軒にまつ新酒の匂ふ茶店哉 姨山
- 106 軒端から柳も扣く茶店かな 柳二
- 107 行戻り茶の淡雪に舎りかな 双李
- 108 若草や前乗も此色なれば 白羽
- 109 市人の汗を捨るやところてん 香都良
- 110 町も今新茶の店の出しなかな 其夕 (十六才終)
- 111 前垂を引摺る茶屋の柳かな 霞流
- 112 牛追を皆酒にする時雨哉 松宇
- 113 蛩さへ爰かと覗く茶店かな 馬佛
- 114 茶の銭のかそへ余りや田螺の蓋 車洛

- 115 寒哉茶屋の鬢に吹たまり 渡柳
- 116 乙鳥の腰掛もあり茶屋の軒 我眉
- 117 白い手もよこす茶店の田にし哉 二藤
- 118 田楽の詠や店のむら紅葉 野牛
- 追加
- 119 海土の名は塩梅にあり田螺汁 塵柴
- 120 淡雪の晨たをしのく淡茶哉 斑石
- 121 扣く手にかりる茶店の蕨かな 巴菱
- 122 早乙女の諷口濡らす茶店かな 不重
- 123 熱揚る釜に蟬鳴茶店哉 友加
- 124 朝寒し茶に奇友も店の市 渡舟
- 125 背戸も今咲日あたりや茶の花香 梧月
- 126 油火の茶店はとろしほたる狩 竹里
- 放光蓮池
- 127 弁天の御手を分てや蓮の紅粉 風可
- 128 蓮池や露も大悲の光りさす 山里
- 129 はずいけにかけも巻葉や二日月 不知作者
- 130 涼しさを蓮からこほす光かな 姨山
- 131 本尊の台の外やはすの花 柳二
- 132 はず池に結ふ巻葉や水の印 双季
- 133 糸にして織ともつきし池の蓮 白羽
- 134 蓮池や仁王は陸に乗おくれ 車洛
- 135 蓮に其爪紅もあり弁才天 松宇
- 136 蓮に照れはなつ光りの観世音 其夕
- 137 弁天は仏の数かはすのうゑ 渡柳
- (十八才終)
- 138 とちらから見ても背ぬ蓮かな 馬佛
- 139 露の玉ゆり居へにけりはずの上 霞流
- 140 極楽を薫らす風や蓮の華 二藤
- 141 汗かいた程は吹けりはずのはな 輔良
- 142 蓮池や真如の月の住ところ 素因
- 143 爪紅は御手洗にあり蓮のはな 履行
- 144 蓮池や戻りに見出す弁才天 其涼
- 145 乗よりも見るこそよけれ蓮の花 香都良
- 146 山寺に爪紅もありはずの花 英紫
- 147 実はずへへと飛ふか池の蓮 可笑
- 148 蓮池や汚泥は見せぬ葉の茂り 我眉
- 149 御仏の誓ひか蓮のすゝしさも 畔鼠
- 150 蛩のみ光りそはなつ池のはず 露旨
- 151 合掌を見習ふはずの苔かな 楚雀
- 152 蓮の花ちるや弘誓の舟幾つ 不來坊
- 153 墨染の袖も匂ふや蓮のとき 竹由
- 154 はず咲や仁王は後向て居る 乙露
- 155 蓮池や寺には似合ふ咲所 有明
- 156 薫る風の出所ゑたり蓮の池 起雲
- 157 葉は市へ散るやふ月の池の蓮 不秋
- 158 蓮池や峯は光りを放しつゝ 秀児
- 159 はずの露本尊の放つ光り哉 枝交
- 160 箔おかぬ池のはちすの涼しさよ 野牛
- 追加
- 161 浮草の世をつまたてゝ蓮かな 塵柴
- 162 大慈悲の光り放つや蓮の紅 斑石
- (十九才終)
- (二十才終)
- (十七才終)
- (十八才終)
- (十九才終)

- 163 結ばらぬ法のしるしや蓮の糸 巴菱
- 164 寺の名は後に問けり蓮の花 不重
- 165 乗すとも目の極楽や池の蓮 友加
- 166 橋姫はのるも手近し蓮の花 渡舟
- 167 殺生の蓋や御法の池の蓮 梧月
- 168 蓮咲やたれを佛の待もうけ 竹里
- (二十ウ終)
- 新橋鵜飼
- 169 鵜遣ひの幾つも越すや山の顔 白羽
- 170 橋陰を闇にも渡る鵜かひかな 乙露
- 171 見る人も繋かれて居る鵜飼かな 霞流
- 172 青柳も闇にさはきてうかひかな 素因
- 173 上み下の鵜飼火涼し橋の上 露旨
- 174 其罪を月には見せぬ鵜かひ哉 我眉
- 175 面白ふ見る人そうき鵜飼かな 馬佛
- 176 楽の闇にまよひてうかひかな 風可
- (二十一才終)
- 177 闇の夜も橋面白き鵜川かな 可笑
- 178 橋杭に一息継すうかひかな 姨山
- 179 はしの闇篝に照らす鵜飼哉 其夕
- 180 螢火は柳に消してうかひかな 二藤
- 181 月代を悪む河瀬の鵜飼かな 山里
- 182 柳散る舟もまたなきうかひかな 松宇
- 183 篝火のもみちを渡る鵜飼かな 双李
- 184 宵の間に月は流してうかひかな 竹由
- 185 振立る火さへ涼しき鵜飼かな 香都良
- 186 橋え来て涼しき物ぞ鵜飼の火 秀児
- (二十一ウ終)
- 187 見る人は罪も浅瀬のうかひ哉 畔鼠
- 188 鵜飼見や橋に浮雲い地獄あり 其涼
- 189 烏羽玉の夜にあやありて鵜飼かな 車洛
- 190 松明は橋の下行うかひかな 履行
- 191 身ふるいは人も涼しき鵜飼かな 作者不知
- 192 三日月の船は流してうかひ哉 不来坊
- 193 脚元の螢はくらき鵜飼かな 起雲
- 194 藻の花もむすほるや鵜の縄さはき 不秋
- 195 橋からは見よしと向ふうかひかな 柳二
- 196 此世から月のなき夜の鵜飼哉 枝交
- 197 はしの下人も潜てうかひかな 楚雀
- 198 影法師は橋の罪なり鵜の篝 輔良
- 199 闇に出てはしの下照るうかひ哉 英紫
- 200 暑き日もしらて世渡る鵜飼かな 有明
- 201 此橋に思案きはめるうかひかな 渡柳
- 202 火と水の中も直して鵜飼かな 野牛
- (二十二ウ終)
- 追加
- 203 宵闇の夏をあやなす鵜川かな 塵柴
- 204 鵜の罪や洩より浮ふ世を渡り 斑石
- 205 入月を篝にかへて鵜飼哉 巴菱
- 206 橋守の夢はあかるし鵜の篝 不重
- 207 石公の下知は涼しきうかひかな 友加
- 208 鳥の罪橋にあかるき鵜飼哉 渡舟
- 209 螢火は橋に残すや鵜の篝 梧月
- 210 化さるゝ狐もあらむ鵜の篝 竹里
- (二十三ウ終)

- 念来時鐘
- 211 華に行耳には響け明の鐘 双李
- 212 雪国や昼さへ氷る鐘のこゑ 姨山
- 213 朧夜やつつみかねたる鐘の声 乙露
- 214 散かゝる花にはつらし時の鐘 山里
- 215 時の鐘に花のつみなし冬木立 不知^{作者}
- 216 短夜や夢は残りてあけのかね 香都良
- 217 花過てとかなく聞かやかねの声 風可
- 218 月花を告るや鐘の延ちゝみ 車洛
- 219 小春にはおしむ花なし鐘の声 柳二
- 220 更行や水も氷りてかねの声 松宇
- 221 朧夜も此常香や鐘のこゑ 白羽
- 222 彼岸会の耳まきはし時の鐘 其夕
- 223 秋の夜の闇にあまるや時のかね 馬佛
- 224 月の夜の鐘や泣子の橋の上 其涼
- 225 短夜や一またきつゝ時の鐘 渡柳
- 226 月の夜は僧もいそくや暮のかね 我眉
- 227 華火見る人も散けり初夜の鐘 二藤
- 228 冴る夜や光明山のかねの声 英紫
- 229 算ふれば夜半の鐘也橋の霜 輔良
- 230 秋の夜もうらみは同じ明の鐘 露旨
- 231 鐘の声隔ぬ雲や花盛り 素因
- 232 花にうき鐘も待なり月の暮 起雲
- 233 明六つは気俣につめて桜かな 有明
- 234 鐘聞や二六時中に散る桜 竹由
- 235 時告るかねは霞な四方の空 霞流
- (二十四ウ終)
- 236 涅槃会にけふは無常や時の鐘 不秋
- 237 鐘つくやすはずは動く十夜堂 枝交
- 238 巢の鳥も二六の鐘に馴染けり 不来坊
- 239 さくらにも叱人はなし時の鐘 楚雀
- 240 枯野へは届き安さよかねの声 履行
- 241 時告るかねも清水の響かな 秀児
- 242 鐘の声日にくちゝむ小春かな 可笑
- 243 置霜に宵より高し鐘の声 畔鼠
- 244 面白く明行鐘や六つの華 野牛
- 追加
- 245 一葉つゝ夢も散けり鐘の声 塵柴
- 246 清水から耳も洗ふやかねのこゑ 斑石
- 247 月ひとつ二千里送れ時のかね 巴菱
- 248 通夜堂の夜長も明て六の鐘 不重
- 249 煩惱の花も散すや時のかね 友加
- 250 朝顔に悟る浮世やときの鐘 渡舟
- 251 凧の運ぶ御法や時のかね 梧月
- 252 明をつく鐘や一〔チ〕夜の花か散 竹里
- 筑摩納涼
- 253 夕涼み拓かせたまへ御注連縄 車洛
- 254 撞ぬ鐘夜は更やすき涼かな 松宇
- 255 すゝしさや仰けは高き神の森 起雲
- 256 涼しさや森も流れに横たわり 其源
- 257 拍手の与所から涼し森の内 有明
- 258 神風の吹集たるすゝみかな 素因
- (二十六ウ終)

- 259 人形は舟に残してすゝみかな 楚雀 (二十八ウ終)
- 260 宮守も風を祈るや夕涼 不来坊 (二十七才終)
- 261 銚子流す下戸の機嫌や涼川 輔良
- 262 神風を分て戴くすゝみかな 履行
- 263 押ふねに人浪立や夕涼 枝交
- 264 涼しさや流れを爰に石清水 竹由(つゆ)
- 265 こゝはまた石に湧来る清水哉 秀児
- 266 神垣の外も涼しき流れかな 英紫
- 267 神風や汗も洗ふて外清浄 畔鼠
- 268 すゝしさや梢々は青幣 双李
- 269 いろくくの袖の薫りや夕涼 不知作者 (二十七ウ終)
- 270 夕すゝみ鍋にはあらぬかふりもの 不秋
- 271 拍手を花火にうつや夕すゝみ 渡柳
- 272 神風の森から続くすゝみかな 姨山
- 273 かみかせを誉て河原の涼かな 可笑
- 274 人の浪うつや河原の夕すゝみ 其夕
- 275 岡を引舟も涼しき宮居かな 乙露
- 276 神風や濁らぬ浪のすゝしさよ 風可
- 277 すゝまはや風よりもまつ河の音 馬佛
- 278 御手洗や水をこゝろの夕涼 我眉 (二十八才終)
- 279 夏の夜の霜や河原の月涼し 香都良
- 280 涼しさや芦の丸屋に一夜鮓 白羽
- 281 かせの手に幣の青や夕涼 二藤
- 282 川瀬にも神楽聞夜の涼かな 露旨
- 283 帷子も源氏は多し夕すゝみ 山里
- 284 笛の音は神楽の外や夕すゝみ 霞流
- 285 神風の恵も嬉しゆふすゝみ 柳二 (二十八ウ終)
- 286 弓張も神の御影や夕すゝみ 野牛 (二十九才終)
- 287 手前にはふくへ備へて涼かな 塵柴
- 288 神風や内外清浄夕すゝみ 斑石
- 289 涼しさや風もすなをに神慮 巴菱
- 290 灯明も瞬く宮の涼かな 不重
- 291 暮かけてこゝろも涼し神詣 友加
- 292 巫の風折もよし夕涼 渡舟
- 293 月涼し仰く試楽の神慮 梧月
- 294 涼しさや蝉の時雨の神の森 竹里 (二十九ウ終)
- 295 笑ひ消す一日くや雪山の山 素因
- 296 西にまた雪の山あり涅槃像 輔良
- 297 朝日影踏落してや残る雪 香都良
- 298 峯の雪に永き日あしの裾寒し 不知作者
- 299 花とのみ入日に見せて残るゆき 乙露
- 300 鶯の啼ぬ高根やのこるゆき 我眉
- 301 雪の果涅槃の翌日も峯白し 其夕
- 302 花まては是見よかしかのこるゆき 馬佛 (三十才終)
- 303 また去年の化粧ひ残るや峯の雪 二藤
- 304 卯華の雪も残るやみねのゆき 露旨
- 305 笑ふ山糸くほに白しのこるゆき 風可
- 306 行春や入日の峯は雪なから 可笑
- 307 花咲ぬ高根も白しのこるゆき 霞流

- 308 佐保姫も片頬笑ふや雪のみね 山里
- 309 道絶へて東風も通はず峯の雪 白羽
- 310 去年の雪峯の模様や腰替り 双李
- 311 春の日の届かぬ峯や残るゆき 柳二
(三十ウ終)
- 312 雪竿の名残やみねを帰る雁 車洛
- 313 峯はまた雪や入日の照りちから 起雲
- 314 麓から春はのほるや残るゆき 渡柳
- 315 入月の跡なを白しのこる雪 畔鼠
- 316 乗鞍や月毛にのこる峯のゆき 松宇
- 317 峯の雪麓は花の雪吹かな 不来坊
- 318 よいほとに峯を配るや残るゆき 其源
- 319 山かけは日も西側かのこるゆき 秀児
- 320 畑打の笠もなかめて峯の雪 履行
(三十一才終)
- 321 谷々は花とも見へて残る雪 不秋
- 322 春もまた配りたらぬやのこるゆき 英紫
- 323 佐保姫の手も及はずや峰の雪 竹由
- 324 乗鞍も銀覆輪やのこるゆき 枝交
- 325 峯はかりまた暮かねて 残る雪 有明
- 326 春の日の裾また寒しみねの雪 姨山
- 327 鶯の声は届かす峯のゆき 楚雀
(三十一ウ終)
- 328 春風のしら地は淋し峰の雪 野牛
(三十二才終)
- 追加
- 329 朧夜の影には堅し峰の雪 塵柴
- 330 笠となり扇と成や残る雪 斑石
- 331 有明の山やしらみて残る雪 巴菱
- 332 蛙なく田に影寒し峰の雪 不重
- 333 永き日にくらへ余るや峯の雪 友加
- 334 日の脚の跨きし峯や残る雪 渡舟
- 335 麓から解るや山の雪達磨 梧月
- 336 春しらぬ山や霞の上の雪 竹里
(三十二ウ終)
- 雌羽瀑布
- 337 山姫の手つくり涼し瀧の糸 竹由
- 338 瀧の糸は絶へて女鳥羽の柳かな 秀児
- 339 水無月に消えぬ手柄や瀧の糸 履行
- 340 岩垣の紅葉こほすやたきのおと 不来坊
- 341 霧雨の常に降る也瀧の下 有明
- 342 行あたる瀧音やまた暑ひ所 其涼
- 343 解て又雪程白したきの糸 起雲
- 344 織姫の糸か女鳥羽の瀧なれば 不秋
(三十三才終)
- 345 滝涼し流れて末も女鳥羽川 英紫
- 346 佐保姫の手にほとけたり瀧の糸 枝交
- 347 時鳥聞はや瀧の月すゝし 柳二
- 348 諫鼓鳥寂をくらへん瀧の音 渡柳
- 349 流水の調も涼したきのいと 楚雀
- 350 律に吹風のしらへや瀧のいと 素因
- 351 虫の音に瘦るやたきの糸までも 車洛
- 352 五月雨にさらすたきあり女鳥羽山 霞流
- 353 瀧の糸にあや織そへよ散る柳 作者 不知
(三十三ウ終)
- 354 たきの音に風も薫るや女鳥羽山 乙露
- 355 秋に染ぬ白地もよしや瀧の糸 我眉
- 356 蔵手のぬれしこと也たきのいと 露旨

- 379 茶の花も薫らはや湯の浦辺り
浅間温泉
起雲
- 378 氷室から解てやふとし滝の音
竹里
(三十五ウ終)
- 377 氷る日は結ひめ堅し滝の糸
梧月
- 376 滝による鹿や女鳥羽に通ふ恋
渡舟
- 375 滝の布畳て瀑す寒かな
友加
- 374 涼しさや岩に乱るゝ滝の糸
不重
- 373 此あたり暑さ碎くや瀧の音
巴菱
- 372 来て見れば夏は嘘也滝の下
斑石
- 371 染時もしらて秋にも瀧白し
塵柴
- 370 此滝の糸も朽木の柳から
野牛
(三十五才終)
- 369 龍田姫染残したりたきのいと
香都良
(三十四ウ終)
- 368 音羽山移して涼し滝の糸
松宇
- 367 滝の糸染ても白し藍の色
双李
- 366 峰々の嵐ぞ「を」たきの錦かな
畔鼠
- 365 五月雨や女鳥羽のたきも肥る音
其夕
- 364 夏瘦は涼し女鳥羽の滝の糸
姨山
- 363 枯木にも芽の明くたきの響かな
輔良
- 362 絞り出すたきの重石や苔の花
白羽
(三十四才終)
- 361 蝉の音もともに落来て滝涼し
山里
- 360 岩間にはむすふ氷やたきのいと
可笑
- 359 滝涼し古ひた岩をそゝく程
二藤
- 358 蝉の耳洗ひ替へけりたきの音
風可
- 357 夏しらぬ所も有けり滝の下
馬佛
- 380 霧は其湯気にも深し浅間山
不秋
- 381 暖な湯や退屈の捨ところ
有明
- 382 湯の山や垢のとれたる鹿の声
竹由
- 383 朝霧も煙と見へて湯舟かな
英紫
- 384 陽炎も湯気に煙と立にけり
秀児
- 385 むすふ手に寒のとける湯舟かな
畔鼠
- 386 萌る名は竹にこそあれ湯の浅間
輔良
(三十六才終)
- 387 湯の山やさきえ羽たゝく鶯菜
履行
- 388 湯の山やころもを振ふ今朝の雪
枝交
- 389 湯のやまや是も葉の菊の露
我眉
- 390 ゆの山や蛇の脱たる衣「も」あり
楚雀
- 391 湯の恩や流れの末の案山子道
車洛
- 392 秋風や竿の浴衣も目白押
不知^{作者}
- 393 湯あかりの素顔も清し水仙花
霞流
- 394 陽炎のしらぬ先なり湯の煙り
香都良
- 395 乗合に寒さ忘るゝゆふね哉
渡柳
(三十六ウ終)
- 396 湯の山や冬もとかめす朝かすみ
白羽
- 397 ゆの山は小春の頃も霞けり
乙露
- 398 湯の山や冬の柳の丸はたか
素因
- 399 ゆの山や一廻りつゝ冬籠
姨山
- 400 湯あかりの肌をくらへん庭の雪
二藤
- 401 乗合の東に霞む湯舟かな
双李
- 402 柳にも衣をかけて湯山かな
可笑
- 403 湯あかりの身もたをやかに柳かな
松宇
- 404 ゆの山や冬たに風も憎まれず
山里
(三十七才終)
- 405 湯の山や冬を忘れて梅の今
馬佛

406 寒梅も洗ひ出したる湯舟哉 風可

407 五月も「雨に」また濡たらぬ湯舟かな 其涼

408 春雨や湯桁の煙り賑はへり 露旨

409 湯の山や梅はつめたき色もあれと 柳二

410 雪も余所より浅間哉湯の手柄 其夕

411 湯あかりや柳にむすふ一重帯 不來坊 (三十七ウ終)

412 滝の湯もけふ幾人に時雨けん 野牛 (三十八ウ終)

追加

413 鳴渡る雁に棹さす湯舟哉 塵柴

414 湯気になを柳も烟る浅間かな 斑石

415 峯ならて霞む麓や湯の煙り 巴菱

416 賑な湯入の連や行々子 不重

417 紅葉する梢に焚て湯の煙 友加

418 華も今湯道に戻る小春かな 渡舟

419 霧深ふ足すや浅間の湯の煙 梧月

420 湯戻りの悦や手織の青嵐 竹里 (三十八ウ終)

湖南竹青翁正秀門人

花実園野牛輯 (三十九ウ終)

〔空白〕 (三十九ウ終)

十景作者

露旨 友成左重治

其涼 西郷新兵衛

風可 近藤要人

英紫 近藤市助

双李 吉武助大夫

畔鼠 野田彦四郎

渡柳 林縫右衛門

二藤 加藤忠之丞

柳二 真木源内

可笑 竹内扇助

松宇 稲村萬介

白羽 関道仙

秀児 いせ町堀内桂

有明 本町日光屋勘兵衛

香都良 同町升屋長左衛門

我眉 中野盛左衛門

輔良 本町麻屋九右衛門

不知作者 堂山与次大夫

起雲 本町 生安寺 看主 (「不知作者」の上に付箋)

其夕 関谷所野右衛門

霞流 鈴木兵大夫内

不秋 林忠左衛門内五平太

姨山 渡辺畏参

竹由 内山石斎

素因 竹内権大夫

不來坊 散良実

楚雀 稲村小市右衛門

枝交 倉光登人

山里 尼子与市右衛門

履行 青沼五右衛門

車洛 本谷三郎右衛門

乙露 近藤庄三郎

馬佛 鈴木兵衛

追加

塵柴 野々山惣右衛門

斑石 多湖岸右衛門

巴菱 吉武権内

友加 中町うら屋甚七

竹里 西郷新兵衛内 折竹清右衛門

不重 右同人字

渡舟 才治

梧月 宮町塩嶋俊碩

以上四十一人

蘭佛編集

明和三丙年

初冬日 出来

資料の翻刻をご快諾下さいました信州大学附属図書館中央図書館に
 感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費17K02447および
 20H04433の助成を受けたものです。